雑誌「コギト」
その創刊号をめぐって

1

雑誌「コギト」は周知のようにデカルトの「タゴゴニエ・ヨンス」からとられた、いかにも学生好みの高踏的な響きをもって誌名である。保田与重郎は耳順に近づいた42年に創設を想定して「幻想の巻」にしばし別れをつぐといふ古人的一句は、わが本報であり、我々の時代の青年、学芸の理想をかざして、栄華の巻を低く見る山上に嘗く以上の本願としてきた。「日本武道院の時代」、と述べているが、そんな学生のただよす高踏脱俗の浪漫的な香気を感じさせる誌名である。また、デカルトが中世世界の通念に懐疑した果てに「吾思」と察う私の存在を絶対としたように、6年の満州事変を大きな転換点として変動する時代を生きる青年たちの衝撃を大いに意識を浮遊させる誌名でもある。

その「コギト」の創刊は7年3月である。いま復刻版を手にすると、表紙は無地で、右肩に黒で「コギト」、左下に緑で「ヘン」であり、扉も「COGITIO」と黒くあるだけのしきけない地味なものである。これが変わるのは同人たちが大学を卒業した年の26号（9年7月）からである。表紙に「ルダーリンの「ヒュペリオン」の筆録に、慶州出光を向きながら、手紙に（小説）は「コギト」既刊総目次（9号）を参考にした上での仮称であり、作者横には（小説）は名前で、これも補足したものである。

手紙
（小説）
やばん・まるも（小説）
明暗
（小説）
あど・ぼろん（小説）
豪華な贅沢
（小説）
時間
（詩）
呪術
（詩）

保田与重郎
二九

田中克己
七八

中山渡
雨
（詩）

山内しげる

ジンケルの音楽（翻訳）

中田英一

印象批評（論評）

服部正己

編集後記

保田重郎

八七

雑誌『コギト』その創刊号をめぐって

昔からある創刊号には大東猛吉（松下武雄）の評論はない。芸術と生活という芸術家における芸術的衝動と人間的衝動を芸術的に表現することは芸術的欲求なればならぬ。芸術家が芸術家の生活を芸術的欲求なればならぬ。芸術家は芸術を芸術とするためには芸術の生活を芸術的欲求なければならず、芸術家は芸術を芸術とするためには芸術的欲求なければならない。芸術家は芸術を芸術とするためには芸術的欲求なければならない。芸術家は芸術を芸術とするためには芸術的欲求なければならない。芸術家は芸術を芸術とするためには芸術的欲求なければならない。芸術家は芸術を芸術とするためには芸術的欲求なければならない。芸術家は芸術を芸術とするためには芸術的欲求なければならない。芸術家は芸術を芸術とするためには芸術的欲求なければならない。芸術家は芸術を芸術とするためには芸術的欲求なければならない。芸術家は芸術を芸術とするためには芸術的欲求なければならない。芸術家は芸術を芸術とするためには芸術的欲求なければならない。芸術家は芸術を芸術とするためには芸術的欲求なければならない。芸術家は芸術を芸術とするためには芸術的欲求なければならない。芸術家は芸術を芸術とするためには芸術的欲求なければならない。芸術家は芸術を芸術とするためには芸術的欲求なければならない。芸術家は芸術を芸術とするためには芸術的欲求なければならない。芸術家は芸術を芸術とするためには芸術的欲求なければならない。芸術家は芸術を芸術とするためには芸術的欲求なければならない。芸術家は芸術を芸術とするためには芸術的欲求なければならない。芸術家は芸術を芸術とするためには芸術的欲求なければならない。芸術家は芸術を芸術とするためには芸術的欲求なければならない。芸術家は芸術を芸術とするためには芸術的欲求なければならない。芸術家は芸術を芸術とするためには芸術的欲求なければならない。芸術家は芸術を芸術とするためには芸術的欲求なければならない。芸術家は芸術を芸術とするためには芸術的欲求なけれ

中島栄次の『時間について落魄』は次のような短詩である。

（2）
玄野茂文

田中克己の「呪呪」三編中の「 mín contre-」をのれ
他人の国の山川を

「lamp」は詩と詩路のエスプレ・ヌーボーの洗礼を受け

北川冬彦「検温器と花」、安藤・安藤の洗脳を受け

北川春彦「対象を通して時代の本質を把握している」と作品

者の違う、方法の違うのが当然あるもの　時代の中で「もの

引く是省略するが中島の「時間」、田中の「碑文」、横』にも

個性の違った、方法の違ったのが当然あるもの　時代の中

の異化がそれほどある　詩路は重く虚構を与える　作品は嘘の世

界としている。ここに閉塞された心の状況からでの脱出に賭ける

異化を反省するの詩　再版版　解説　自注を含む

時代の再版　ながら発足したので　を発した　の書は　都市には失

業者の増大　農村ではは米価体系の悪化による危機を深刻化し

機械による反体制運動への抵抗強化　ポルシェ文化運動自体の

強化における反体制運動への抵抗強化　ポルシェ文化運動自体の

内部分裂　経済・政治・思想の混乱　賛美曲　危機意識

そのにおける「表現にあこがれること　青年の多分波動的意識と心情を

見ると　山に嘆く　ような超俗的　浪漫的な作品がある　それは田中

集「山上療養所」、大編後記で松下を悼む　創刊時に回想して真率

に直訳する文章の一節

一文、その謳名のも高闕的な姿勢　保田の回想する「巻を低く

読む山に嘆く　ような超俗的　浪漫的な作品がある　それは保田　

の小説「ぼん・まるち」である　これは　14年に松下武雄の遺稿

集「山上療養所」の編集後記で松下を悼む　創刊時に回想して真率

に直訳する文章の一節

我々はそのこころハイドゥーとか　フッサールやシェラーなどを云

って居る　文学上の芸術派　我々のまえから　芸術として　芸術として

「表現にあこがれること　青年の多分波動的意識と心情を

見ると　山に嘆く　ような超俗的　浪漫的な作品がある　それは保田　

の小説「ぼん・まるち」である　これは　14年に松下武雄の遺稿

集「山上療養所」の編集後記で松下を悼む　創刊時に回想して真率

に直訳する文章の一節

我々はそのこころハイドゥーとか　フッサールやシェラーなどを云

って居る　文学上の芸術派　我々のまえから　芸術として　芸術として

「表現にあこがれることがある　青年の多分波動的意識と心情を

見ると　山に嘆く　ような超俗的　浪漫的な作品がある　それは保田　

の小説「ぼん・まるち」である　これは　14年に松下武雄の遺稿

集「山上療養所」の編集後記で松下を悼む　創刊時に回想して真率

に直訳する文章の一節

我々はそのこころハイドゥーとか　フッサールやシェラーなどを云

って居る　文学上の芸術派　我々のまえから　芸術として　芸術として

「表現にあこがれることがある　青年の多分波動的意識と心情を
雑誌「コギト」その創刊号をめぐって

しかし、保田の小説『海辺の広場』の作家が、20世紀初頭に描かれた社会の変化に触れた作品であり、それは対面の社会的変化に対する反響をも含んでいる。彼の小説は、従来の社会の変化に対する反応を描き、20世紀初頭に描かれた社会の変化に対する反響をも含んでいる。

この作家の作品は、社会の変化に対する反響をも含んでいる。彼の小説は、従来の社会の変化に対する反応を描き、20世紀初頭に描かれた社会の変化に対する反響をも含んでいる。
国文

論文、評論、随想を常時執筆していく力に見ることに同人誌をしっかりとしたタイプの作戦が感じられる。なお、この性格の形成過程で大きな役になるのは哲学、法学、文学、政治、経済、社会、科学、歴史、地理など、多岐にわたり、無数の専門分野の知識を活用する能力と、それを活用するための手法である。特に、哲学の知識が重要である。哲学の知識がなければ、他の専門分野の知識は理解しきれない。また、哲学の知識がなければ、他の専門分野の知識は表現しきれない。哲学の知識がなければ、他の専門分野の知識は説明しきれない。哲学の知識がなければ、他の専門分野の知識は解釈しきれない。哲学の知識がなければ、他の専門分野の知識は分析しきれない。哲学の知識がなければ、他の専門分野の知識は推定しきれない。哲学の知識がなければ、他の専門分野の知識は予測しきれない。哲学の知識がなければ、他の専門分野の知識は理解しきれない。哲学の知識がなければ、他の専門分野の知識は表現しきれない。哲学の知識がなければならない。}

2

注目した同人誌は、毎月発行され、月刊誌である。創刊号は1980年9月に発売された。増刊号は1990年9月に発売された。全12冊である。創刊号は「新しい風土」と題し、文化芸術、文学、社会学、政治学、経済学、科学、歴史学、地理学など、多岐にわたる知識を活用し、多角的に論じる。増刊号は「新しい風土」と題し、文化芸術、文学、社会学、政治学、経済学、科学、歴史学、地理学など、多岐にわたる知識を活用し、多角的に論じる。
雑誌「コギト」その創刊号をめぐって

「コギト」といえば名が踏実だ。世にいうけれど、私たちはすべての」と似てない。しかし私たちは同人誌の一つの姿で通じてゆく企画を持ち上げた。私たちは、「何がどのように書かれるか、新しい物語をつくるか、つまり文学、という生の実験をどうするのか」という見解を毎月うたう。それが文学、と私たちは書いた。しかし、私たちは「コギト」を愛する。私たちの古文を愛する。私たちの「コギト」の愛がある。

昭和初年の学生の関心をも深くとれた相互制定の流が、この「コギト」の発刊号をもって始まる。昭和3年3月に、大阪府立吉中学院の生徒が「コギト」という名の協同で、『コギト』の創刊号を発行した。それは、学生たちの感想、感想の反映であり、エロ・ユーモラスな流れや、映画や舞台など、テーマに左傾したテーマを掲載するのが特徴である。この「コギト」は、昭和20年代の文壇に大きな影響を与えた。

しかし、「コギト」はただの文学誌だけではない。それは映画や舞台、音楽、アートなど、多様なジャンルを含むものである。学生たちは、その多様性を愛し、尊び、その愛を表現した。それが「コギト」の魅力である。

昭和20年代後半から昭和30年代にかけて、昭和期の文学界を象徴するものとして、昭和20年代後半から昭和30年代にかけて、昭和期の文学界を象徴するものとして、「コギト」はその存在を確認する。「コギト」が、昭和20年代後半から昭和30年代にかけて、昭和期の文学界を象徴するものとして、「コギト」はその存在を確認する。
波動のように昭和初年は、殊に青年を変革、革命の理論に誘った時生産を基盤にした社会状況を安らぎの田舎生活の裏に、あなたが生きる世界の拡大を要求して、彼の言葉を口にしていたのです。彼は「マルクス主義」の影響を応用し、新たな青年を育てることを目的として、共産党の活動を展開しました。彼の言葉の基盤は、国勢の拡大を求める青年たちの精神的成長を図るため、彼自身もその影響を受けて、新たな社会の実現を求めていました。
雑誌「コギト」その創刊号をめぐって

も、カントもフォッサール、ハイデガーやも、ほんの同じところで同じ
ほどの対象として考察されにある・（日本浪漫派時代）、これは後
年の、やや整理されすぎた、合目的化されたちもあるが、これを先
の「ひそかに乗廻す」との短歌、または小説、「寄生」（37号）にあ

ひたすらに生き心を定めかねヘギュの雪に縁縁さすね

等を重ね、彼の初期の文章に加えて考察してみる・一つには、マ
ルクス主義、現実と自己との落差に生える苦絶的な心地、その心情
を、絶対、究極の至上理念に昇華しようとする浪漫的体験という
ことが出来よう。

近代社会はよく言われように、ゲミュシュ鏡ット的社会へケ
ルクス主義も、現実と自己との落差に生える苦絶的な心地、その心情
そのままの自由の概念を主張して現実批判を期し、展開する、一方で個
主主義の個の確立を主張して現実批判を期し、展開する。一方で個
の組織体としての実利主義の社会は、19世紀の浪漫主義を生ん

地理位置の総体としてのガイシャットの社会へ離断を期し、展開する。一方で個
主主義の個の確立を主張して現実批判を期し、展開する。一方で個
の組織体としての実利主義の社会は、19世紀の浪漫主義を生ん

厳格な生活感情、さらに、美意識に近しにしていく、殊に、保田らが
保田らが
の教育の学校としてのガイシャットの社会へ離断を期し、展開する。一方で個
主主義の個の確立を主張して現実批判を期し、展開する。一方で個
の組織体としての実利主義の社会は、19世紀の浪漫主義を生ん

のディオンド浪漫派は、セントリックの社会への苦絶感情を保も
のディオンド浪漫派は、セントリックの社会への苦絶感情を保も

のディオンド浪漫派の哲学的な表現がヘギュ哲学であり、マル
のディオンド浪漫派の哲学的な表現がヘギュ哲学であり、マル

のディオンド浪漫派の哲学的な表現がヘギュ哲学であり、マル

のディオンド浪漫派の哲学的な表現がヘギュ哲学であり、マル

方、この保田が、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治的、政治の
文化に発表され、文学の維持を可能にするものである。しかし、ポエミズムは単なる文学的表現の枠組みであり、文学の主体的な存在を否定するものではない。その点において、ポエミズムは文学の発展を支える重要な要素である。

詩の意味のない詩を書ることによってポエミズムの意味を理解することは、文学の発展を支えるために求められる。したがって、文学の発展を支えるためには、詩の意味のない詩を書くことが必要であるといえる。

しかし、ポエミズムは単なる文学的表現の枠組みであり、文学の主体的な存在を否定するものではない。その点において、ポエミズムは文学の発展を支える重要な要素である。
雑誌「コギト」その創刊号をめぐって

第三冊（4月3月）に、

義眼の中にダイヤモンドを入れて貰ったと、何になろう。昔の
生えた胎骨に薬草を懸けたと、それが何になろう。

桀を出なかったのが春山である。この春山が、【ALBUM】と同じ

いう最も古い文化の発祥の地が生地、小説『佐渡へ』（6号）には、

国分寺で薬師如来の様観ができなかったことに触れて、

どうせ奈良から外へ出て古代の芸術を求めてみたいなかった。実は、自己

の芸術意識、美意識を幼年の日から啓蒙した日本最古の美術と文学
への憧憬が彼を古典からかけたのである。こういう保田、彼は

中学時代から鹿児島滞逗の『万葉集古義』を織るという早熟ぶりであ
るが、その誇張もあって、同人としては高校時代から日本の古典に親

し、もって『保田の小説「青空の花」』（34号）によっても篠せ
られるところである。

ともに、彼らは西欧の古典に親近していたのである。哲学者や

三郎の編集する学術雑誌『思想』（5月8月号）に発表した保田の『好
財産家の起源』の引無いような論文だという。論文は未見であ
るが、篠田説から考えると、これは保田における日本の古典への関

という。
心を語るとともに、先に引用したベーグルもマルクスも、カントも同じ形の対象として考えていた彼の哲学への、高校生らしい親近、陶酔ぶりを語るものである。その哲学の世界より重要なもののは、ドイツ浪漫派への接近である。ノヴァリス、ハイニシュレーゲル兄弟、更には先行するルーテル、ゲーテへの親近は、服部正己、田中克己、薄井泰夫らが数多くの紹介をし評論も書いている点からも分かり、保田の文章には殊に多く言及されている。創刊時ににおける彼らの共通した心情を考えるとき、现实との落差に生じる心情は、最も早く近代にあって近代を批判し、個我の解放に生の感情を奔流させるドイツ浪漫派に古典を発見し、互いの生の意識の探究に情熱を注いだことも納得できる。このように東西の古典に親近するが、これは単なる歴史、古典への回帰ではなく、彼の古典への憧憬はその内部にいかに反時代的、反現代性を示すもので、彼の古典への憧憬は、その内部にいかに反時代的、反現代性を示すもので、それだけではなく、マルクス主義を含めての近代主義が古典時の流れに関連づけ提えたのは、7年という時代にあって革新を求む、希有なことに、7年という時代にあって革新を求む、希有なことに、7年という時代にあって革新を求む、希有なことに、7年という時代にあって革新を求む、希有なことに、7年という時代にあって革新を求む、希有なことに、7年という時代にあって革新を求む、希有なことに、7年という時代にあって革新を求む、希有なことに、7年という時代にあって革新を求む、希有なことに、7年という時代にあって革新を求む、希有なことに、7年という時代にあって革新を求む、希有なことに、7年という時代にあって革新を求む、希有なことに、7年という時代にあって革新を求む、希有なことに、7年という時代にあって革新を求む、希有なことに、7年という時代にあって革新を求む、希有なことに、7年という時代にあって革新を求む、希有なことに、7年という時代にあって革新を求む、希有のものである。この古典の親近は、前年9月に発生した満州事変を背景におって保田が同年、「当時の国家の状態は、肉体による詩的表現を、民族主義者によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現によって現代を風刺した社会主義者によって唱え、日本主義者の詩的表現において、書かれた心理学書を断定したことに関連して、初めて保田自身の文学観を開陳している。
雑誌「コギト」その創刊号をめぐって

本誌「コギト」の創刊号をめぐって

文学はつねにあらゆる科学の終るところで道を通じる。多くの科学

学はつねにあらゆる科学の终るところで道を通じる。多くの科学

親近性を保持するがそれでも云べる。しかし乍然既に論じた様に、この

意味からしての文学は哲学と最も

の理解の客観であり、哲学者の哲学的枠組みをもつ。それはたとえ生

際より、爾が人間に為すべきの大義を捉り来れ、通路においても

が「コギト」が、少くとも保田がこの同人雑誌に何を賭け

ていてかは明白である。

この文学観、「広く天空ことに」という浪漫精神には、ようやく萌芽し

けた市民社会が萌芽しつつ、その間は閉塞凍結されかけたる日北村

谷、「人生に相違かるは何の謂る」という「コギト」を空際に投げ、空

を広く天空にかける。枠組内にとこめられはるのに反

し、彼は広く天空にかける。枠組内にとこめられはるのに反

り、彼は広く天空にかける。枠組内にとこめられはるのに反

の広さに押しぼめるものであった。

この文学観、「広く天空ことに」という浪漫精神には、ようやく萌芽し

けた市民社会が萌芽しつつ、その間は閉塞凍結されかけたる日北村

谷、「人生に相違かるは何の謂る」という「コギト」を空際に投げ、空

際より、爾が人間に為すべきの大義を捉り来れ、通路においても

が「コギト」が、少くとも保田がこの同人雑誌に何を賭け

ていてかは明白である。

この、ともすれば熱くなる文学観意識を支え、抑制したのは、中島

次郎であつて、中島次郎はあくまで、作家の深き心の客観化されて

る中島は、「作品とはあくまで、作家の深き心の客観化された

以上が実在そのものである。一方絶対理念には、「偉大なる作家は常に古典の前

で決して自大せぬ。しかも自らを虚することにより、再び古典の反

抗を企てたのである。最も古く古典に沈潜し、最も鏡自体を消し

得るものにして、初めて深い愛をそれから脱して古典への反抗

をなしの。そこに真の趣味の創作があらう。この文言もあるが、

とある。保田を初めての時代の潮流にあって、その抱懐

する浪漫精神によって刊行した「コギト」であるが、編集後記にあ

るような熱情が深遠たるするには、時間を必要としたのである。発

足したものの、その方向をははま定めたのは号号と田中は言う。号号

には中島「批評」、保田「オプションズ」、田中「佐藤春名小論」と

評論に見るべきものであるものの、なぜ文学をするかの詩「支那」と保田の小説「いとてれれもゆえにかすとろおあ

白」という文学意識は濃厚に表現されているもの、作品としては

稚拙である。3号には松下武雄著「芸術と生活」、保田「文学

術と心理学」、4号には明治犀著「芸術の誕生を探求し、芸術家とは

何かを解明し、その在り方を論じ、伊藤整の正統的なモダニズム文学観を批評して浪

漫主義への志向を明確にした保田、この二人にとって方向は定ま

った、田中は指向するのだろう。

しかし、方向は定まったと言えるものの、なぜ文学をするかの

初心を、同人それぞれの個性に於て醸成し、現実意識の深化のうち

に絶対的、無限なるものへの近接を意味する浪漫精神を己の文学と

（12）
詩論は以降の新詩運動の成果を収録して、その感覚、発想も鏡く秀れている時代のも魅惑感を愛の世界にまで持たせる。新詩人は確かな登場を告げるも、戦争の侵略性を暴く発想の見事さをふくめて、新詩人の誕生を証明するような作品である。知的で重視感のある思考を作品に沈滞させて抒情の世界を確立した田中君の詩風は、この6・7号で開花し、戦争の間を越えて Naked and Dressed（1931年）の「ハーレム・アラビアン」を初出した「フリードリヒ・ヘルデルリーン」の掲載を6号から改称して刊出し、これが保田に与えた影響は殊に大きい。たとえば、田中氏の直接であるが、彼の保田は卒業論文にヘルデルリーン、オーボーエルフ、およびフレーディングを扱うだけでなく、彼の代表作の一つである「浮遊的な詩人 ヘルデルリーン覚書」を文学界に2月に発表している。また、保田は卒業論文にヘルデルリーン覚書を扱うだけでなく、彼の代表作の一つである「浮遊的な詩人 ヘルデルリーン覚書」を文学界に2月に発表している。
雑誌「コギット」その創刊号をめぐって

京派散文を基盤としての「コギット」が形成されたとみてよい。その創刊と同時に、11号号において発表される「作家の危機」は、京派の危機を物語っている。京都が中心の京派が、近代文学への参加を模索していた時期に、京派の中でも中島はその中心人物であった。中島は、京派文学の創設者であり、田村茂の友人でもあった。「コギット」は、田村茂、中島、松浦幸郎、フアン・アリューガ、ド・ドゥミールの京派中心の雑誌であり、京派の文学を代表する存在であった。

しかし、京派の文学は、社会的な変化に伴い、壊れることも避けられなかった。特に第二次世界大戦後、日本の文学は、戦前の文学と大きく異なり、新しい文学が生まれ始める。この時期には、「コギット」は、新しい文学の先駆けとなり、その影響力はますます大きくなった。

「コギット」の影響は、現在もなお続いている。京派の文学は、その後の文学界に大きな影響を与えてきた。そして、京派の文学は、現代の文学界においても重要な存在であり、京派が残した文化遺産は、今後も引き継がれるものと考えられる。

（14）
せめしざ協同の為の実を挙げる様を論じ、これを『コギト』の上に目を向ける。

その時、同人誌はシュールで、『アカデミー』の立場として、当時、文学を創造する文学の常識の立場であった同人誌とは違い、文学の常識の高度な啓蒙、新文学の創造こそ超俗の立場として、アカデミーの導入を求める、と強調するのである。その後、同人誌の最上流の存在として、『文学的常識』の使命であると主張し、『文学的常識』の使用を要求する。

この「協同の為の実を挙げる様を論じ」を考えれば、文学の常識としての、文学的常識の高度な啓蒙、新文学の創造こそ超俗の立場として、アカデミーの導入を求める、と強調するのである。その後、同人誌の最上流の存在として、『文学的常識』の使命であると主張し、『文学的常識』の使用を要求する。